

# 『おくのほそ道』に登場する動植物について

平 智・今井健治・小笠原千晶・菅井元基・匹田直宏・深澤美幸

山形大学農学部  
e-mail: staira@tdsl.tr.yamagata-u.ac.jp

## Plants and Animals in “Okuno-hosomichi”

Satoshi TAIRA, Kenji IMAI, Chiaki OGASAWARA, Genki SUGAI,  
Naohiro HIKITA and Miyuki FUKAZAWA

*Faculty of Agriculture, Yamagata University*

**Keywords** : 俳句, 季語, 食べ物, 松尾芭蕉

紀行文を含む文学作品には、その時代の生活文化が幅広く投影されていると考えられる。著者らはこれまでに、国内外の民話や童話、ならびに歴史小説等に登場する果物や野菜などの食べ物と人間との関わりを考察してきた(平ら, 2010)。これらの作品に登場する食べ物には、その時代の食文化や作者が生まれ育った環境が少なからぬ影響を与えているものと思われた。

『おくのほそ道』は、江戸時代初期に松尾芭蕉が東北地方を中心に旅をした折に綴られた紀行文である。したがって、作品中に登場する動植物や食べ物から当時の食生活や生活環境、さらには、作者とそれらとの関わり的一端がうかがえるものと期待される。芭蕉はわが国の最も著名な俳聖の一人であり、『おくのほそ道』でも訪れた先々で多くの俳句を詠んでいる。それらの俳句中にはしばしば動植物や食べ物が登場している。例えば、「閑さや岩にしみ入る蟬の声」、「夏艸や兵共が夢の跡」や「秋すずし手毎にむけや瓜茄子」などの俳句があるが、『おくのほそ道』全文中には果たしてどのくらいの動植物や食べ物が登場しているのだろうか。さらに、それらは作者とどのような関わりをもっていたと考えられるのであろうか。

本資料・報告は、『おくのほそ道』に登場する動物と植物、ならびに食べ物の種類数と登場回数を調べ、芭蕉とそれらとの関わりについて若干の考察を加えたものである。

### 調査方法

『新編日本古典文学全集71巻松尾芭蕉集②』(小学館,

2008)に収録されている『おくのほそ道』の全現代語訳(小学館『サライ』2008年9月号別冊付録)を調査の対象とした。まず、全文中に登場する動植物および食べ物をすべて抽出した。次に、全文を俳句(短歌を含む)と俳句以外の部分(以下、本文と呼ぶ)に分け、それぞれの部分に登場する動植物および食べ物の種類ならびに登場回数を調査した。なお、動物については、哺乳類、鳥類、両生類、魚類ならびに節足動物に分類した。

### 調査結果と考察

全文中に登場する動植物ならびに食べ物の種類数とそれらのべ登場回数は、動物が19種類で38回、植物は60種類で111回、食べ物は6種類で8回であり、植物が種類数、登場回数とも多く、食べ物はきわめて少なかった。

これらの動植物ならびに食べ物をそれぞれの登場回数の多い順に示すと、最も多かったのは松の16回であり、次いで、馬の14回、「木」(「」をつけたものは総称を示す。以下も同様)の7回であった(第1表)。

全文を俳句と本文に分けると、俳句部分には動物が13種類で16回、植物が20種類で27回、食べ物は3種類で3回登場した。これに対して、本文には動物は11種類で22回、植物は49種類で84回、食べ物は3種類で5回登場した。なお、『おくのほそ道』には俳句が63句と短歌が1首掲載されているが、俳句の約半数にあたる34句に動植物あるいは食べ物が登場していた。そのうち最も登場回数が多かったのは萩の4回であった。これに対して、本文で最も登場回数が多かったのは松の13回であった。

『おくのほそ道』に登場する植物および動物には、梅花や菊、蟬などのように全文を通してただ1回のみ

2011年4月20日受付。  
本資料・報告の内容の概要は、人間・植物関係学会2010年大会において報告した。

第1表. 『おくのほそ道』に登場する動植物および食べ物とそれらの登場回数.

登場回数	動物	植物	食べ物
16		松	
14	馬		
7		「木」 <sup>2</sup>	
6		柳	
5		「花」 <sup>2</sup> , 萩	
4		「草」 <sup>2</sup> , 苔	
3		青葉, 卵の花 <sup>3</sup> , かつみ	
2	「鳥」 <sup>2</sup> , 「魚」 <sup>2</sup> , 郭公(ほととぎす) <sup>4</sup> , 蚕(のみ), 鶴 <sup>5</sup> , 雌鳩(みさご) <sup>6</sup>	紅葉, 栗, 薄, 桜, 草むら	茶, 酒
1	蜘蛛, 木啄(きつつき), 蜂, 蝶, 蚊, 虱, ひき, 蚕, 蝉, きりぎりす, 鳧(けり), 初雁	花の梢, 若葉, 撫子, 篠, 玉藻, 杉, 青葉の梢, 茨の花, 椽, 麦の葉, 早苗, 遅桜, あやめ, 馬酔日(あせび)の花, 林, あやめ草, 菅, 木々, 黄金花, 夏州, 小笹, 紅粉(べに)の花, 檜, 樹木, 稲, 笹, 篠竹, 桜の木, 遅桜の花, 梅花, 山桜, 桜の老木, ねぶの花, 藤, わせ, 小松, 菊, 古松, 夕顔, 糸瓜, 鶏頭, 箒草, 芦, 穂, 松の木	このしろ, 料理, 瓜, 茄子

<sup>2</sup> 「 」をつけたものは総称を示すものとして表出しているもの.

<sup>3</sup> 卵の花と卵花の2種類の表記を含む.

<sup>4</sup> 郭公とほととぎすの2種類の表記を含む.

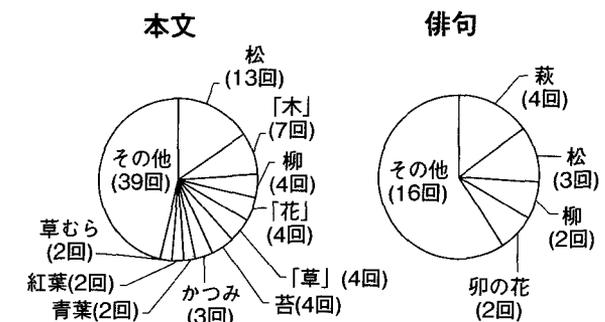
<sup>5</sup> 鶴と鶴の2種類の表記を含む.

<sup>6</sup> 雌鳩とみさごの2種類の表記を含む.

登場するものがかなり多く、松(16回)や馬(14回)のように何度もくり返し登場するものはごく少数であった。とくに、動物については、馬以外は1回あるいは2回だけの登場回数のものがほとんどであった(第1表)。ただし、松は岩沼(現在の宮城県と考えられる)で10回、馬は那須野(現在の栃木県と考えられる)で6回登場しており、登場回数の多いものは特定の場所でまとまって登場する傾向があった。つまり、全文を通してさまざまな場所で頻りに登場する動植物はほとんどないことがわかった。

なお、『おくのほそ道』に登場する動植物は、俳句中の季語として登場することがたびたび認められた。例えば、紀行文の前半では、若葉や青葉、郭公(ほととぎす)などの夏の季語が多く、後半は、萩や初雁、きりぎりすなどの秋の季語が多かった。

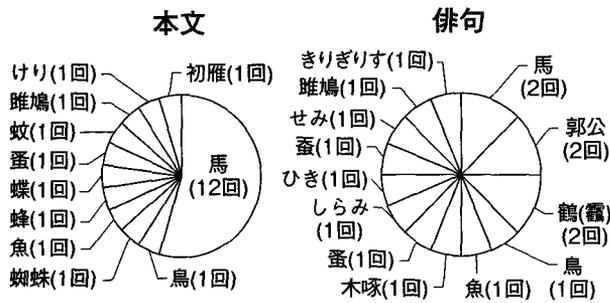
『おくのほそ道』に登場する植物が、動物や食べ物に比べて種類数、登場回数とも多かったことは、芭蕉が訪れた先やその道ゆきの街道沿いなどで様々な植物をよく観察していたことを示しているものと考えられた。植物のうち、とくに松や柳の登場回数が多かったが、これは芭蕉が私淑していた西行にゆかりの松や柳を見に行くことを『おくのほそ道』の旅の目的の一つにしていたためと推察された。ただし、ほとんどの植物は何度もくり返して登場するわけではないことから、基本的には訪れた先々で印象に残ったものをそのつど記載していたものと思われる(第1図)。



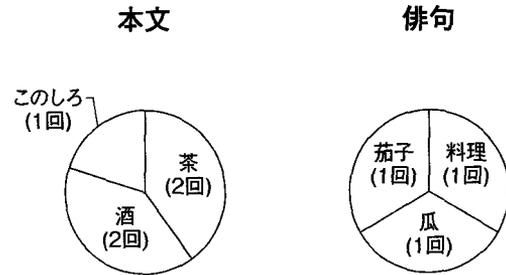
第1図. 『おくのほそ道』に登場する植物の種類と登場回数. 登場回数が1回のもはその他にまとめて示した.

動物に関しては、馬が多数回登場したが、それ以外の動物の登場は1回あるいは2回だけの登場であった。馬の登場回数が多い理由として、当時は馬が人や物を運ぶ最も主要な手段であったことがあげられよう。馬以外の動物では、鳥類および節足動物がそれぞれ7種類および9種類と多かった。これらの動物は、俳句部分では季語として、また、本文においても季節感を表現するための手段として登場する場面が多かった(第2図)。

食べ物の登場は全文を通じて6種類、8回のみであり、動物や植物に比べると種類数、登場回数とも少なかった(第3図)。これは、『おくのほそ道』の旅の目的が西行のゆかりの地を訪れることやその周辺の名所、旧跡を訪れることであり、その土地の美味しいも



第2図. 『おくのほそ道』に登場する動物の種類と登場回数.



第3図. 『おくのほそ道』に登場する食べ物の種類と登場回数.

のを食べたいという作者の欲求は小さかったためではないかと思われる。

以上のように、『おくのほそ道』に登場する動物および食べ物はそれほど多くはなかったが、植物はかなり多く登場していた。それは、植物に関する記載をその土地の情景や季節感を表す手段の一つとして用いたことや俳句の季語としてしばしば植物が使われたためであると考えられた。この点は、動物にもほぼ同様の傾向が認められたが、植物に比べて種類は少なかった。このように芭蕉は、旅行中に見た風景や季節、ならびにその変化を表現するために、しばしば植物や動物について記載したものと思われた。

## 引用文献

- 平 智・川野美保・山崎雪恵・小岩井 優・宮沢喜一. 2009. 日本民話やグリムおよびアンデルセン童話に登場する果実や野菜をはじめとする食物について. 農業および園芸 84 : 715-722.
- 平 智・村岡 翼・渡邊奈穂子・木村正勝・小林恵美・奥山忠洋. 2010. 藤沢周平の作品に登場する果物と野菜をはじめとする食べ物について. 人間・植物関係学会雑誌 10(2) : 35-37.